

平成30年度版

愛えがお顔



感動ものがたり

「感動のエピソード」
& 「愛顔の写真」

愛媛県



想いを、つなぐ。地域を、つなぐ。

心に留まる、伊予銀行のコラムサイト



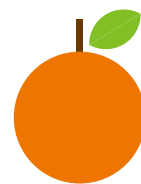
iyomemo



column

お金のことだけじゃない!?

観光や地域のはなし、配信中♪



伊予銀行



女子
大由心
去いん
せん

水樹奈々

 愛媛銀行

愛^{えがお}顔とは？

人と人との助け合い、

支え合いの根底にある「愛」と、

困難にくじけることなく挑戦し、

道が開けた時にこぼれる「笑顔」が

結ばれて生まれた言葉。

愛媛県は、

「愛^{えがお}顔あふれる愛媛県」を

目指しています。



知事あいさつ

愛媛県知事 中村 時広

本事業は、愛媛県が提唱する「愛顔^{えがお}」を全国に広く発信し、本県の知名度向上と愛媛ファンの獲得につなげるとともに、「愛顔あふれる愛媛県」の実現に向け、機運醸成を図るために実施しているもので、今回で5回目を迎えます。今年度は、エピソード部門に、46都道府県と四つの国から2、496作品、写真部門についても、45都道府県から5、349作品もの応募をいただきました。厚くお礼申し上げます。

エピソード部門は、芥川賞作家で「千の風になって」の作曲家でもある新井満さん、若手俳人のトップランナーとして活躍中の神野紗希さん、そして私の3人が最終審査を行い、写真部門では、本県出身の世界的写真家である白川義員さんにも御協力いただき、それぞれ受賞作品を思考しました。

知事賞をはじめとする各賞に選ばれました皆さん、誠にめでとうございます。拝見した作品は、どれもぬくもりと感動に満ちた力作ぞろいで、選考には大変苦勞いたしました。中でも、エピソード部門で知事賞に輝いた二つの作品は、作者が経験した心温まる偶然の再会、視力が失われる不安をかかえた高校生の前向きに生きる強い決意がえがかれたもので、審査委員一同胸を打たれました。

今回の受賞作をまとめた本作品集を多くの方々が見覧になり、たくさん「愛顔」が大きな輪となり、全国各地へ広がりますことを切に願っております。

終わりに、応募いただきました方々をはじめ、本事業に御協力を賜りました関係者の皆様に深く感謝を申し上げます。

目次

「エピソード部門」 一般の部

「知事賞」	あんまり似てないな	幾原 正智 (徳島県)	8
「特別賞」	お婆さんの当たりクジ	松田 良弘 (大阪府)	10
「優秀賞」	緩やかな坂道で 電車の中で	今北 亜希子 (北海道)	12
	父の笑顔	城田 由希子 (奈良県)	14
「入選」	愚痴の五重奏	澤谷 真琴 (東京都)	16
	かあちゃん分まで 愛情という名の視力	中村 千代子 (香川県)	20
	告白のあとで	今野 芳彦 (秋田県)	18
	声援	井上 優加 (大阪府)	22
	公園へ行くわけ	福島 洋子 (長崎県)	24
	約束	武智 早苗 (愛媛県)	26
	私の還暦祝い	山花 薫 (京都府)	28
「佳作」	骨太の母	山田 修 (神奈川県)	29
	イス取りゲーム	森井 朱美 (奈良県)	30
	はじめてのありがとう	長谷川 真弓 (神奈川県)	31
	代打は祖母	佐藤 陽子 (岡山県)	32
	こどもの日	小池 司 (東京都)	33
	爺ちゃん、頑張りよるよ	相野 正 (大阪府)	34
	歳の離れた私の弟	牧田 恵 (鹿児島県)	35
		神野 洋平 (愛媛県)	36
		山本 詩文 (愛媛県)	37

「エピソード部門」 高校生以下の部

「知事賞」 願い事

「特別賞」 大好きな町

「優秀賞」 おばあちゃんの笑顔

キャプテンのポケット

民泊ありがとう

「入選」 おばあちゃんの日記

笑顔の手紙

失ってわかる宝物

誰かの支えに

どん底の私を救った笑顔

「写真部門」

『一般の部』

「知事賞」

「白川義員特別賞」

「河原学園賞」

「優秀賞」

「入選」

ピカピカの1年生

無限の愛

命の輪廻〜笑顔の会話〜

鯉のぼりのように！

握手

楽しく笑う

大好き！赤いブランコのある公園！

初めての雪

この頬のぬくもり、ずっと忘れない

わーい！こいのぼりまでジャンプ！

わーっはっは

松浦 佑美 (愛媛県 高校生) …… 40

大石 美優 (愛媛県 高校生) …… 42

近藤 陽菜 (広島県 高校生) …… 44

花山 実紗希 (愛媛県 高校生) …… 45

市山 茜 (愛媛県 高校生) …… 46

別宮 彩音 (愛媛県 高校生) …… 47

芳谷 華林 (愛媛県 高校生) …… 48

蔭平 莉奈 (愛媛県 高校生) …… 49

高野 未祐 (愛媛県 高校生) …… 50

東 竜希 (愛媛県 高校生) …… 51

小野 早苗 (神奈川県) …… 54

山崎 唯 (熊本県) …… 54

中森 理紗 (愛媛県) …… 54

中村 天津 (京都府) …… 55

佐々木 順哉 (埼玉県) …… 55

井田 金久 (三重県) …… 55

柚本 宜之 (愛媛県) …… 56

渡邊 久枝 (愛媛県) …… 56

岩渕 友香 (三重県) …… 56

宮谷 美由香 (愛媛県) …… 57

石崎 美恵 (愛媛県) …… 57

『小・中・高校生の部』（小学生未満含む）

「知事賞」	おとうととおいかけっこ	山本	言葉（愛媛県 小学生）	……	58
「白川義員特別賞」	ぼくの宝物	窪田	宜久（愛媛県 小学生）	……	58
「河原学園賞」	仲良しファイブ	玉井	未留（愛媛県 高校生）	……	58

『一般の部』

「愛媛県商工会議所連合会賞」	孫と折り紙	法隆	直史（埼玉県）	……	59
「愛媛広告協会賞」	コミカルファミリー	忽那	博史（埼玉県）	……	59
『小・中・高校生の部』（小学生未満含む）					
「愛媛県獣医師会賞」	best partner	坪井	琉華（愛媛県 高校生）	……	59
「愛媛県情報サービス産業協議会賞」	夢の書道パフォーマンス甲子園！	山戸	祐璃（愛媛県 高校生）	……	59
「愛媛県歯科医師会賞」	94回目の秋の訪れ	小笠	友理子（香川県 高校生）	……	60
「愛媛県理容生活衛生同業組合賞」	笑賀男（えがお）	唐澤	賀伊（長野県 高校生）	……	60
「愛媛県IT推進協会賞」	ああ!!美味し!アツぷっぷー!!	中野	殊実（兵庫県 高校生）	……	60
「愛媛県経済同友会賞」	ヨッシャーいくぞ!	村島	大晴（沖縄県 高校生）	……	60

「エピソード部門」一般の部

「知事賞」

あんまり似てないな

幾原 正智（徳島県）

父が子供好きを公言してたので近所の赤児持ちの母親達がほとんど勝手に私の家に。自分が出かけたい時は赤んぼ置いてゆくようになった。父と母は働いてるので一番早く学校から帰って家にいる17才の私に赤児を押しつけてゆくのだ。隣りに住む医者やすこの娘の安子ちゃんの子守りが一番手こずってとにかく抱いたりおんぶして歩き回らないと泣きわめく。ベッドには置けないのだ。大変ばかりではたまらないのである時樂しみを覚えた。安子ちゃんに甘いペロペロキャンデーなめさせたあとレモンをなめさせる。すると今まで笑っていた顔がすっぱい!!という顔をする。又キャンデーなめさせるとものすごく可愛い顔で笑う。その笑顔とすっぱい顔の対比が見たくって何度もくり返した。今から思えばひどい事をしたもんだ。後悔しきり。2年ほどたって私の家も安子ちゃん一家も別々の土地へ引っこした。62才の時私は背中と腹の度々の激痛に見

舞われた。胆のう炎という診断で薬で胆石取れないかと薬ばかり飲んで逃げ回っていたがとうとう命の危機レベルに悪化して手術をするはめになった。担当は病を初めから診てくれていた女医で手術室に入ると「がんばりましようね」と言ってくれた。10秒くらいで麻酔が効いて眠りに落ちると5分くらいで、女医の声で「大丈夫ですか起きて下さい」と体をゆすられて起きた。自分では5分眠ったと思っていたのだが2時間30分ほどたっており手術は終わって私の胆のうはなくなっていた。女医に「お世話になりました」というと女医は「私も赤ちゃんの時はお世話になりました。となりのお兄ちゃん。安子です」とニッコリ笑った。46年の歲月飛びこえて一気に思い出した。女医さんの名前初診から聞いていたはずなのに病氣のことで精一杯で思いつかなかったのだ。「赤ちゃんの頃の笑顔とあんまり似てないな」と言う。「あたり前です」と言われた。おかしくて大笑いしたら傷口がかなり痛かった。あれから一年安子ちゃんのメスで私は元気だ。

「特別賞」

お婆さんの当たりクジ

松田 良弘（大阪府）

子供の頃近所の駄菓子屋に、ちょっと変わった〴〵当たりクジ〴〵がありました。それはお菓子を買わなくても挑戦できるもので、クジに当たると、店主のお婆さんが漫画の本を一冊貸してくれるのでした。当たりを決めるのはお婆さんで、その当たりの判定基準というのが、〴〵今日、誰が一番笑っているか？〴〵というものでした。

私達は毎日笑ってお店に入りました。お婆さんの目は抜かりがないので、私達はお店の中だけではなく、お店に入る前から笑顔でいました。友達と喧嘩をした日、親や先生に怒られた日、サッカーの試合に負けた日、それが引きつっていても、私達はとにかく笑っていました。そうしているとき、不思議と気持ちが和らいできて、いつの間にか自然な笑顔になっていくのでした。そして見事にクジに当たると、漫画の本まで読めて、ずっと笑顔でいられるのでした。クジに外れても悲しい顔は出来ま

せん。明日の審査は、今から始まっているからです。

「笑顔でいるだけで、人は幸せになれる！どんな時でも笑顔でいよう！」

いつもお婆さんは、私達に誰よりも素敵な笑顔で声を掛けてくれました。後になって知った事でしたが、お婆さんが貸してくれる漫画は、お婆さんの亡くなったお孫さんが集めていたものだったそうです。笑顔が絶えなかったお孫さんの姿を、お婆さんは私達に重ねていたのでしょうか。

あの頃お店に通っていた仲間達は、みんなそれぞれに色々な人生を歩んできましたが、どんな困難な場面でも、笑顔で乗り越えてきました。それは、あのお店の、あのお婆さんの「愛顔」の当たりクジのおかげだと思います。一日を笑顔で過ごしていれば、小さくても幸せな毎日を送れる事を、お婆さんは教えてくれました。

いつも愛顔が溢れていたお婆さんの駄菓子屋は、今でも私達の心の中で営業中です。

「優秀賞」

緩やかな坂道で

今北 亜希子（北海道）

「よいしょ。よいしょ。」

緩やかな坂道に差し掛かると、自然と声が漏れ出てきて、自転車をこぐ脚にも力が入ってくる。大きく肩で息をしながら、そのまま自転車をこいでいると、ふいに、とんとんとん。と誰かに背中を押された。リズムよく、とんとんとん。とんとんとん。背中を押しているのは小さな可愛らしい手だ。

三歳の息子を幼稚園に迎えに行き、自転車の後ろに乗せて家に帰る途中である。その途中にある坂道で、息子はいつも背中を押してくれる。母の息づかいを子どもながらに感じ、とんとんとん。と背中を押して手伝ってくれているのだ。

息子に優しく背中を押されていると、ふいに私は思い出した。自分が幼稚園に通っていた頃のことをだ。息子と同じようにかつて私も、母

の自転車に揺られ、送迎をしてもらっていた。母の自転車は心地良く、十五分程の道中が楽しみでならなかった。特に、帰り道は幼稚園まで母が迎えに来てくれた喜びと相まって、なんとも言えない至福の時間であった。赤信号で自転車が止まる度に母の腰に手を回し、ぎゅっと抱きついた。母はこちらを見て嬉しそうに笑ってくれた。それを見てまた私も嬉しくなった。

ふと、我に返ると、私と息子は緩やかな坂道を登り切っていた。私は息子を見つめて、「とんとんとんって手伝ってくれたんだね、ありがとう。」と言う。息子はこれでもかというぐらいの愛顔を見せて、「いっしょにのぼれた。おかあさん、だいすき！」と言って私の腰にぎゅっと手を回し抱きついてきた。たまらなく可愛い。幼かった頃の自分と、母親になった自分。どちらも幸せな時間を、母や息子と共有しているそのことに、喜びと愛しさを感じずにはいられない。母が私の愛顔を守ってくれたように、これからは私が息子の愛顔を守っていかなくてはと、春の陽射しの中で思うのであった。

「優秀賞」

電車の中で

城田 由希子（奈良県）

おしゃべりに夢中の高校生数人が電車を降りた。車内は一変して静まり返った。だが、その静けさはつかの間だった。一歳ぐらいの女の子が目を覚ましたのか、ぐずり始めたのだ。私は向かいのベンチシートを見た。お母さんが必死にあやしているが、泣き声が大きくなってくる。周りの乗客たちは泣き声の方向をちらちらと見る。迷惑そうな表情を隠せない。今にも誰かが「うるさい」と言い出すのではないかと、私は内心ドキドキしていた。

女の子は手足をばたつかせ、全身で不機嫌を表現している。何とか助けたいと思うが、なす術がない。泣き声はますます大きくなり、お母さんは汗だく。女の子の声とお母さんのあやす声だけが響く。そろそろ我慢の限界か。誰かが怒り出すかと思った矢先、女の子の泣き声が少し小さくなった。さすがに泣き疲れたのだろうと私はホッとした。

ところが、女の子は私の座っている座席の方を見て、なんと「キヤッキヤ」と笑い出したのだ。その視線を追うと、私の隣から六人離れた席に座る中年男性に行き着いた。その男性が女の子に向かって、「いないいないばあ」を繰り返していたのだ。それも声を出さずに。

その男性は、実は私の夫だった。乗車したとき隣り合わせの席が空いておらず、別々に座ったのだ。女の子は、先ほどの泣き声よりも元気な声で笑う。それがどんどん大きくなっていく。きつと笑いのツボに入ってしまったのだろう。夫の顔を期待して見つめ、何度も「いないいないばあ」を笑顔で催促する。周りの乗客は女の子と夫を交互に見ては、声を出さずに笑う。お母さんも汗を拭きつつ、夫に会釈をしながら笑う。

私からはよく見えないが、きつと家族にあきれられているあの変顔を披露しているのだろう。私は心の中で夫に「頑張れ」とエールを送り続けた。

数分後、女の子は夫に手を振りながら、ご機嫌で電車を降りていった。再び静まり返った車内で、夫はしきりに汗を拭いていた。

「優秀賞」

父の笑顔

澤谷 真琴（東京都）

父は昭和五年生まれで、当時は、『地震、雷、火事、親父』と言われるくらい父親は怖い時代だった。そんな時代に、父は息子である私の兄によく言い聞かせていた。

「いいか、女つてものには怒っちゃいけないんだ。男は怒鳴ったり暴力を振るったりしちゃいけない。そんなのは弱い男がするもんだ」

お陰で私には父にも兄にも怒られず、大変勝気で陽気に育った。地震も雷、火事も怖い親父は怖いどころか常に優しかった。

幼い頃は父の帰宅に気付くと玄関に飛び出していった。三つ指ついでお出迎えではない。子犬のように飛び付くのだ。父は満面の笑みで私を高く抱き上げる。電灯の高さまで上がるたびに

「今日も電球に届いた！」

と嬉しくて、父の笑顔と電球の灯りがまぶしかった。父は心の安全基地

で明るい光だった。

そんな父が八十歳を過ぎて認知症になり、様々なことを忘れていくようになった。離れて暮らす私のことは名前を忘れ、次第に存在も忘れるようになっていった。

今は癌の終末期で入院している。お見舞いに行つて顔を見せると娘の存在は思い出すようだ。生気のない顔に反射的に笑顔が浮かぶ。娘の名前もエピソードも思い出せない父だが、感情が蘇るらしい。可愛いと思つていた感情が。

父の手を握ると私の手を見て、か細い声で囁く。

「お前はよく働いているな。えらい」

「どうして？」

「こんな日に日に焼けている」

言葉に詰まる。認知症ってなんだろう。たくさんのことを忘れるのになんとか私を褒めようとする父。

幼い頃に電灯と一緒に輝いていた父の笑顔がそこにはあった。いつもこの笑顔で安心したのだ。病床にあっても人を励ませるということを今、私は震える心で学んでいる。

「入選」

愚痴の五重奏

今野 芳彦（秋田県）

今日は暑くて庭の草薙りも中止だ。

向こう三軒両隣も畑仕事に動きが見えず、婆さん連中が我が家に集い茶飲み会になる。

菓子をパリパリ頬ばりながら、亭主への愚痴五重奏が響いてくる。

連れに先立たれ一人身の方もおられ、ここぞとばかりに口を開く。

「家に居ると寂しくて、朝採りのキャベツに胸の内をさらすと楽になる、逆らわず黙って聞いてくれるからねえ、それが玉葱だと切っている内に貫い泣きしてしまうの」と笑う。

向かいの婆さんは「家の亭主、加齢臭の消臭剤を振りまいて、どう消えたかと聞くの、それで死臭は遠ざかったわよと答えたら憤慨よ、未だ死には縁遠く長生きするから大丈夫という意味なのに、錆びた脳では裏心が読めないのね」と亭主をコケにするので回りにクスクス笑いが広が

る。

一通り愚痴を吐いて解散、一人身の婆さんがもう少し居させて欲しいと茶を催促する。

被っているニットの帽子、何故か記憶に残っていて、老脳を探ると亡くなつた御亭主とペアの帽子だと気付き、それを話すと「あら気付いてくれて嬉しい、でも、これは爺さんの帽子よ」と恥じらい「私の帽子は綻びが出て処分し、押入れに仕舞っていた爺さんを使っているの、何も香りがしないけれど、私の心には爺さんの残り香が伝わるの、このズボンも爺さんなので、ウエストサイズは何とか合うけれど、裾は二十センチも切つて繕つたのよ、スマートだったのね」と自慢気に語り照れ笑う。「薄い年金の身だし使える物は利用しないとねえ、三回忌も過ぎたし形見のお披露目ね」ズボンを何度も擦る仕草に、夫婦の糸の太さが感じられ眩しく見えた。

お付き合いには心の車間距離が大切で、守つてこそ笑顔の五重奏になり、ある人には励みの応援歌、ある人には御詠歌となり、私は黙って浸り、それを心の栄養にしている。

「入選」

かあちゃんに分まで

中村 千代子（香川県）

いつもどおり姉を見舞った。数日前から目も開けなくなり、眠り続けている。枕元で、大好きな白梅が咲いているのも知らない。

「今夜が危ないです。覚悟しておいて下さい」

回診に来た主治医に告げられた。

その日、私は新品のデジカメをバッグに入れていた。退職祝いに、親しい仲間たちから貰ったものだ。

「かあちゃん、写真撮るよ」

姉に語り掛けた。幼い頃から母代わりをしてくれた姉のことを、私はいつもかあちゃんと呼んでいた。

かあちゃんは、何の反応も見せずじっと目を閉じたままだ。顔は大きく腫れあがり、元気な頃の面影もない。

使い方もよく分からないまま、姉の寝姿を何枚か撮った。最後の写真

になるかも知れないと思いながらシャッターを押した。

医師の言ったとおり、夕方から降り始めた雪に連れていかれるように、姉は亡くなった。

私が撮った写真は、やっぱり最後のものとなった。

あれから十数年が過ぎ、来年は十三回忌を迎える。先日、アルバムを見ていて驚いた。あの最後の写真、よく見ると、姉はかすかに笑っているのではないか。

「かあちゃん、こっち向いて」

カメラを向けて、声を掛けた私の方をじっと見ていたのだ。目も少し開けている。意識を失くしてはいなかったのだ。私を喜ばせようと思つて、一生懸命カメラの方を見てくれたのだろうか。涙が出てきた。

私にとって、あの微笑みは姉ちゃんのとびっきりの愛顔に見える。生前、あまり笑うことのなかった人だから尚更そう思える。

姉ちゃんは、私に言いたいことがいっぱいあったのかもしれない。言葉の代わりに、微笑みを残してくれたような気がする。

かあちゃん、私ね、このごろ毎日笑ってるんよ。かあちゃんに分まで笑って暮らすね。

「入選」

愛情という名の視力

井上 優加（大阪府）

「目が見えんくても、心の中で見えるんよ。」

ゆかちゃんのことを大好きやからね。

あの頃わからなかった祖父の言葉の意味が、最近になってやっと、わかるような気がする。

一九九七年、冬。当時私は五歳。同居する祖父は、目が見えなかった。年々体のあちこちが不自由になって、その頃は一階の自室にほぼ寝たきり。主に二階で過ごす私達と生活の場を共有することはほとんどなかった。だから、きつとおじいちゃんは寂しいに違いない。子ども心に決めた私は、その日一日を祖父の部屋で遊んで過ごすことに決めたのだ。一階に行き「来たよ。」と声をかけると、祖父が嬉しそうに声を出す。「おじいちゃんの顔かいてあげる。」と色鉛筆を広げる私に、祖父は「おじいちゃんもかいてみよか。」と微笑んだ。「えー？」五歳の子

どもは、不信感を隠そうともしない。きつとかけないだろう、そう思った。「茶色、黒、茶色。」祖父が色を言う。私が色を渡す。風で窓がガタガタ揺れるが、カーペットで温かい。鉛筆が紙の上を滑るさらさらという音と、遠くに二階のテレビの音が響いていた。ふと思いついて、私はこっそり祖父が言ったのとは違う色を渡し始めた。もちろん祖父は気づかない。笑いを堪えていると、「できた」と声がかかった。本当に上手な女の子だった。目や鼻の位置もぴったりで、色もほとんどはみ出していない。ただ、些細な悪戯のせいで髪の一部が赤く、唇は青かった。私は興奮して祖父のことを褒め称えた。目が見えないなんてきつと嘘だ。すごいすごいと騒ぐ私に、祖父は心の中で見えるのだと言った。「ゆかちゃんのこと大好きやからね。」と照れたように笑っていた。

祖父が亡くなったのは、それから三年後だった。今、あの絵はない。たぶん捨ててしまったのだろう。あの笑い声も、もう聞けない。

けれど、ここにはなくとも私の心には今もはつきりと、あの絵のことが見えている。理由はずっと前から、教えてもらっていた。

「入選」

告白のあとで

福島 洋子（長崎県）

「わ、わし、ALS（筋萎縮性側索硬化症）という難病じゃ。いつかは動けなくなるんよ」

うづくまり、畳にこぶしを叩きつけるN先輩。号泣するその姿に呆然と立ち尽くす私。

二十八年前の晩秋の夕暮れ、古い木造アパートでの出来事だ。

当時私は広島の大学へ通う二年生。数日前研究室対抗の学部祭で一年上のN先輩の演出で創作劇を上演し、見事入賞。その賞状を届けに自転車で彼の部屋を訪れたのだ。

気さくだが、ちとおっさんくさいN先輩。九州出身同士だからか気が合い、色気抜ききの兄妹みたいな関係だった。

「先輩ン家の冷蔵庫、キャベツばっかじゃん」

勝手に上がり、冷蔵庫を開けた私。ところがいつもの陽気な切り返しがなく、拍子抜けしたところに冒頭の告白。その日は大学病院の定期検査で、想像以上に数値が悪かったらしい。

「先輩……何言いよるん？ 嘘じゃろ？」

「ほんまじゃ。最近踵が上がりにくいんよ」

ぼつぼつと涙ながらの説明。数年前に病気が判明し、大学を受け直したこと。〈キャベツ親父〉とからかわれるほどキャベツ好きなのは病気の進行を遅らせるビタミンEが豊富だからであること―etc。

「サイクリング部も研究室行事も精一杯楽しんでるけど、いつまで普通に暮らせるか……」

「……………」

ショックで何も言えずにアパートを後にした私。帰る途中、広島ではおなじみの匂いが鼻腔をくすぐった。

三十分後、再び先輩の部屋を訪れた私。

「先輩、皿二枚出して！」

ふたりでつついたのは、まだ湯気の上がるアツアツのお好み焼。

「お前、どうせ買うならホタテとかイカがどさーっと入った高いヤツにせえ」

「一番安いブタ玉そばでもキャベツがぶち入っとるんじゃけえ、贅沢言わんの！」

腫れぼったい目を細め、いつものようにわははと豪快に笑ったN先輩。

あれはまさに最高の〈愛顔〉。

いま彼は二児の父として、仕事もバリバリの現役。病気は進行中だが、たくましく人生を楽しんでいる。

そう、あのときと同じ愛顔で。

「入選」

声援

武智 早苗（愛媛県）

「頑張れ、頑張れ、もとき。」

「がんばれ、がんばれ、じいちゃん。」

平成十六年八月三十一日、初めて坊っちゃん球場で読売ジャイアンツが試合をすることになり、野球が大好きな父が、私の四歳になる息子を連れて試合を観ていた時のことでした。

父は、その当時アイドルのように大人気だったジャイアンツの元木大介がバッターボックスに入るのを見て「頑張れ、頑張れ、元木。」と声援をおくったのですが、それを聞いた孫が「がんばれ、がんばれ、じいちゃん。」と声援し始めたのでした。父は最初、孫が何故このようなことを言い始めたのか不思議でたまらなかったといえます。しかし、すぐに気がついたそうです。それは「元木」と「元幹」を孫が勘違いしたということです。

息子は元気の元と木の幹で「もとき」という名前です。私のお腹の

中にいるときから、産院で「この子は未熟児で産まれる可能性が高い。」
と言われ、元気で木の幹のようなしっかりとした大きな子に育って欲し
いと願い、つけた名前でした。

じいちゃんが自分を応援してくれていると思い、自分もじいちゃんを
援しようとした大きな声で声援した息子を、誇らしく思いました。

あれから十四年たった今、今度は本当に、

「頑張れ、頑張れ、元幹。」

と一塁側スタンドから大勢の人が息子を声援してくれました。夏の愛媛
県高校野球大会、背番号「1」をつけた息子は、坊っちゃんスタジアム
のマウンドに立ちました。苦しい場面では、より大きな声で「頑張れ、
頑張れ、元幹。」と声援してもらい、灼熱の暑さとプレッシャーとでフ
ラフラになりながらも、精一杯、力のかぎり九回を投げ抜きました。結
果は負けてしまいましたが、「応援ありがとうございました。」と頭を下
げに来た時の、満面の愛顔は清々しいものでした。たくさんの人に応援
してもらった経験は、息子にとってかけがえのない宝物になった夏でし
た。

「佳作」

公園へ行くわけ

山花 薫（京都府）

我が子が小学生の頃、休日だというのに朝早くから近くの公園へ行くのです。

私はこっそり後をつけました。公園には誰もいません。すると、子は公園に散らかったゴミを拾い集め、屑箱に入れている場面を目にしました。それから、ひとり黙々と逆上がりの練習を始めました。

私は声を掛けず気付かれないよう、物陰から密かに見守ることにしました。きつと子は体育の授業で出来なかったのです。だから、朝が苦手でも公園へ行き、人が誰も来ないうちに練習を…。

運動の下手だった私も同じような経験がありました。我が子に遺伝してしまったのか、スポーツが得意でない私に似たことを可哀想に思いました。でも、子は違っていました。出来るまで繰り返し返し頑張っています。

「諦めるな！ 頑張れ！ 俺を超えろ！ 子の思いをどうか叶えてください」と、私は天に祈りました。

私は腰を掛けていた周りの草に目が止まりました。四葉

のクローバーを偶然にも二つ見つけたのです。きっと良いことが起こりそうな予感がしました。

暫くして我が子の喜ぶ大きな声がしました。

「出来た！出来た！」

その様子を見ていた私は嬉しさのあまり感動してしまいました。思わず飛び出し、我が子を抱きしめていました。

突然、私が現れたので子はびっくり。子は嬉しそうに私に言いました。

「僕、逆上がり出来るようになったよ。今やるからパパ見ていてね！」

二人に笑顔がこぼれました。四葉のクローバーは優しい心の子と頑張っている子への贈り物だったのです。

「佳作」

約束

山田 修（神奈川県）

どうしても大学に行きたかった。学校の推薦で就職したが、間も無く辞めた。やっぱり諦め切れなかった。

「入学金を貯める」家族の反対を押し切り、重労働を始めた。道路工事、建設現場、港湾の荷降ろし、屈強な男達に交じって働いた。早朝、深夜の猛勉強、昼間の重労働に耐え、やっとの思いで、合格通知を手にした。

「お金が足りない！」愕然とした。

特待生に成れば、入学金程度で済むと思っていた。だが、合格した大学は、入学後の成績で選考する制度だった。

「足りない分は出すぞ」父が言った。

精一杯の笑顔だったが、辛かった筈だ。私には、もう後がなかった。甘えた。

父は、定年で退職していたが、また働き始めた。息子の思いに応えようとした。

私は特待生を父に約束した。奨学金を貰い、勉強とアルバイト、懸命に頑張った。

やっと自分の途に戻った。だが、一年も経たない内に、

父が突然に逝った。話をする間もなかった。

二年生の春。父が喜んでいる夢を見た。笑顔で、何かを言っていた。

数日後。大学の掲示板に、大きく書かれた私の名前があった。特待生に選ばれたのだ。

授賞式は万感の思いだった。飛んで家に帰り、賞状と報奨金を母に渡した。母は、嬉し涙で仏壇に供え、「約束でしたね」父に報告した。姉二人も笑顔で駆け付けて来た。

「あつ、あつ！」春風が吹抜け、賞状を飛ばした。捜しに出たが、直ぐに近所の人が届けて来てくれた。噂が広がり、皆が集まって来た。地域に一体感があつた頃だ。

「偉いな、良かったね」笑顔が満ちた。

母はお茶を配りながら、嬉しそうだった。

私は母の笑顔が嬉しかった。父との約束を果たし、重かった気持ちが晴れた。

突然の春風は、父が皆に自慢したくて、誘ったのかも知れない。

「佳作」

私の還暦祝い

森井 朱美（奈良県）

とうとう、還暦を迎えた。でも実感もなく、何の感慨もなく、通り過ぎようとしていた。ところが、三姉妹の一番上の姉が、還暦祝いをしようと言ってくれた。姉達の還暦は、華やかに祝いの席を設けて、たくさんの方々の祝福を受けた。

しかし、私は至って地味、そんな晴れがましいことは、不釣り合い。でも、姉は全て段取りを考えて、食事の席を用意してくれたので喜んで出席した。

こうして、姉妹三人だけの還暦祝いが始まった。いつも隅っこにいる私が、今日は主役、なんだか落ち着かない。祝いの色紙まで頂いて恥ずかしいような、嬉しいような、ふわふわした気持ちでいた。すると、姉が「これは母からや」と言っ、金封筒とカードをくれた。何気なく、そのカードを開くと、母の歪な字が目飛び込んできた。「これ、お母さんの字！お母さんの字」と叫ぶと同時に涙が溢れた。母はもう、字が書けなくなっていた。会話すら難しく、声が出ない。だから、私はひどく驚いた。

すると、姉が「二年位前、もう字が書けなくなるなあと、思い、私への還暦祝いのカードを書いてもらったのよ」と、優しく説明してくれた。

それを聞き、余計涙が止まらなくなった。タイムカプセルのような母の字を見て感激し、その字を二年前から用意してくれた姉。涙が止めどもなく溢れ出て、恥ずかしげもなく、「わーん！わーん！」と大声で泣いた。こんなこと初めて、自分のことで嬉しくて、声を出して泣いたのは。私のことをこんなにも考えてくれた姉。「母のような深い愛情を注いでくれて、ありがとう」と言いたいのに、言葉にならず、ただ泣いていた。九十一歳の母の言葉は、六十歳おめでとー！いつもありがとう。生きていてね。元気でいて下さい。又来てね。待っています。母の声が聞えて来そう。こんな素敵な還暦祝いをありがとう。私は幸せです。

「佳作」

骨太の母

長谷川 真弓（神奈川県）

火葬場で母の収骨に居合わせた皆が驚いた。なんと大腿骨が二本、崩れもせず、水まきホースくらいの太さで並んでいる。二本とも骨壺に入りきれずによきつと顔を出す。やむなくこんこん叩いてやつと蓋をすることができた。百二歳の、愉快さ骨太級の人生だったが、骨になっても周りに愛顔を生み出す底力を見た気がした。

母とのかかわりでは笑いが絶えない。私の結婚が決まった招待状を送ったとき

「あら、親を招待するんだったら、普通は往復のチケットと、新しい草履くらいは送り付けてくるものよ」と言う。「逆でしょう？親なんだから、お祝いのダイヤとかくれでもないんじゃない？」と反論。「そうだね。じゃあダイヤモンド三キロくらいでいいかしら？」と母が切り返した。

毎年春になると母は秋田の山菜を送ってくれた。あるときお嫁さんが写した写真が一緒に入っていた。早速電話で

「けっこう美人に写ってる」と伝えると

「あなたたち娘四人に美貌を全部上げちゃったから、こちらが空っぽになったと思っただけでしょう？ところがどっこい、自分の分はまだまだちゃんと残してるのよ」とのたもう。

四年位前、まだらボケになっていた母を見舞ったことがある。

「明日横浜へ帰るからね」

と言つて電気を消そうとすると、母が

「あのね、あなたもあだのこうだの、いろいろご託を並べたりしないで、適当な人がいたらお嫁にもらってもらいなさいね」と。母は目の前の私を何歳だと思つていたので。七十四歳の、四人の孫もいる私ではなくて、母が見ていたのは嫁の貰い手がなくて、母の心を悩ませ続けた問題娘だったのだ。母に抗わずに「分かった。そうするよ」と答えた。あの時代の心配をここまで抱えてくれていたのかと母の愛情の深さに打ちのめされた。これもまた骨太級である。

「佳作」

イス取りゲーム

佐藤 陽子（岡山県）

昼過ぎの電車に空き席はなかった。

私は臨月のお腹を突き出したまま、仕方なく吊革を握った。私の前には男子高校生が二人、腕組みをして寝ていた。

初めての妊娠は思ってもみなかったほどハードだった。普通の動きができない。階段の上り下りもお腹を手で支えないと万有引力に負けて下腹が裂けるようで怖い。それでも側から見ると妊婦は微笑ましい光景に映るのか年配の男性などは「今はいいけれど生まれたら大変だよ」などと呑気なことを言う。

電車の震動のせいとか三kgの胎児がさつきからお腹を蹴っている。背骨と太ももがずしんと重い。お腹がどんどん張ってくるのが分かる。これはちょっとまずいことになった、と思ったその時、高校生の横に座っていたおじいさんが怒鳴った。

「コラーお前ら立てー」。寝ていたはずの高校生二人は威勢よく飛び上がった。仰天している私におじいさんは「座りな

さい。席が空いたよ」とスッキリした笑顔で勧めた。

二日後、私は無事に女兒を出産した。その女兒も今では小学生の母になっている。

その日の電車は混み合っていた。八十歳位の姿勢の良い女性が私と孫の前に立った。

私は席を譲るべきか迷った。声を掛けて逆に迷惑がられた、とよく聞くからだ。私の隣には若い男性もいる。どうしよう、ぐずぐず考えていたら横に座っていた小学生の孫が「どうぞ」と席を立った。

「あら、優しいのねえ、ありがとう！」嬉しそうに微笑んで女性はそっと座った。

すると隣にいた若い男性が「はい、座って」と孫に席を譲った。孫は「イス取りゲームみたいだね」とニカッと満足そうに笑った。

周りにいた人達もゆったり微笑んでいる。混んだ電車が快適に思えた。

「佳作」

はじめてのありがとう

小池 司（東京都）

私にとつての愛顔、それは娘の三歳の誕生日に妻と娘が見せてくれた愛の溢れる笑顔だ。

その頃、私の娘は周りの子に比べて言葉を感じるのが遅く、簡単な会話をするのはまだ難しかった。しかし、言葉は喋らずとも娘は喜怒哀楽の表現がとても豊かで、私たち夫婦は娘の成長をゆっくり見守っていかうと考えていた。それでも、妻は周りの子を見て、時折娘の成長の遅さに不安を感じていたという。

娘が三歳を迎えた日、私たちは娘の好物のハンバーグを作って、誕生日祝いをした。ハンバーグを食べ始めた娘は笑顔で「あー」と言って私たちに笑ってみせた。私は美味しそうで何よりと笑顔を返したのだが、横で突然妻が咽び泣いたのだ。聞くと、妻は先日娘の友人の誕生日会に参加した際、両親にお礼を言う娘の友人の姿を見て、自分の娘がまだ話せないことにとても不安になったという。そのことを娘の誕生日に思い出してしまい、堪えきれずに泣いてしまったのだ。

私は妻をなだめようとするが、ずっと不安だったのだろう、しばらく泣き続けてしまった。すると、娘は席を立って母に駆け寄ると、彼女の頭を撫でながらにこりと笑った。そして、ゆっくりと言ったのだ。「ま、ま、あー」と。妻は驚いた様子で娘を見て、何と言ったのか聞いた。すると、娘は満面の笑みでもう一度、今度は正確にこう言ったのだ。「ま、ま、ありがとう」。それを聞いた妻はまた泣き出した。しかし、その表情はとても嬉しそうだった。妻は娘を強く抱きしめて、同じように「ありがとう」と返した。そして、私にも「ぱ、ぱ、ありがとう」と笑顔を見せてくれた娘に、私もまた泣きながら彼女を抱きしめた。

そのときの私たち家族の表情は、とても愛に溢れた笑顔だった。なぜなら、人生で初めて娘から感謝をされた特別な日の、特別な愛顔だったからだ。今でもその愛顔を忘れていない。五歳になった娘は、今も私たちに笑顔で言う。「今日もお疲れ様。ありがとう」と。

「佳作」

代打は祖母

相野 正（大阪府）

「おばあちゃん、強いね。おいくつ？」

「へえ、七十六ですんねん」

私と祖母がいつものビアガーデンで飲んでいると、近くの席の人が声をかけてきた。

親を失った私を一人で育ててくれた祖母だが、老いても酒を飲む姿が私は好きではなかった。特に好きなビールを飲むと饒舌になり、肴は私のこと。それも嫌だった。

ある夏、祖母がビアガーデンで生ビールを飲んでみたいと言った。TVのCMで知ったらしい。連れて行くと、大ジョッキを二杯近く空けて周りの注目を浴びた。それ以来毎年、二人の行事になったが、七十六歳のこの夏は、さすがにジョッキは一杯だけに減り、祖母は珍しく昔の話を始めた。

普段、思い出話は殆ど口にしない。祖母の波乱の人生には、懐かしい場面より辛く悲しい物語のほうが多く詰まっていたからだ。

「あの人はお酒がダメやったから、飲むのは私の役目やった」

初めて知った。酒が飲めない明治の政治家の妻として、夫の代わりに数々の酒席でグラスを重ねてきたことを。

「でも冬の夜は、ホットウイスキーを一杯だけ作って二人で飲むのが楽しみやった」

ここではないとも、早く失った夫や子の思い出を夜空に浮かべ、心の奥に溜めていた涙とともに飲み乾していたのかもしれない。

孫の私は酒の肴ではなく、たったひとつの自慢だったのだ。

祖母は、席を立つとき突然「タダシ、ありがとうな」と言った。このささやかな望みを叶えていることか、それとも久しぶりに思い出を口にできたことなのか。

そのときの祖母は、今まで見た中で最も柔和な愛顔を浮かべていた。

「長生きしてや、おかん」と、私が耳元で言ったとたん、祖母の目尻から涙がこぼれた。

私の母だった祖母。しかし、これが二人の最後のビアガーデンになってしまった。

「佳作」

こどもの日

牧田 恵（鹿児島県）

ある日、夫が登山を始めた。凝り性の夫は、すぐに山道具のイロハを吸収し、あっという間に道具をそろえた。「一緒に行く」と水色のザックをプレゼントされ、私は、まるでランドセルを買ってもらった小学一年生のようにうきうきとした気持ちになった。

山デビューの日は、五月五日のこどもの日だった。雲ひとつない晴天だった。私は、早起きして、おにぎりを握り、沢山の玉子焼きをタッパーに詰めた。真新しい登山ウェアに身を包み、私たちは雄々しい山の麓に立った。意気揚々と歩いていたのは、ほんの最初だけだった。あとはゼイゼイ息を切らしながら、ごつごつした道をひたすら歩いた。汗が流れ、全身、雨に濡れたようにびっしょりになる。

私たちには子どもが出来なかった。軽い気持ちで不妊治療を始めたが、治療の成果は出なかった。先が見えず、出口もなく、暗い山道に迷いこんだようだった。子どもを連れた家族を見ては、途方にくれた。私は、こどもの日が嫌いになり、私たちは治療をやめた。

登山では、普通の生活では絶対に感じることもない苦しさを味わう。そんな中で、小さな花をみつけたり、すと開けた木々の間にきらきら光る湖が見えたりすると、心の底から感動がわき上がる。先を歩く夫が、振り返って私が追いつくのを待っていてくれたり、岩場で手を貸してくれるのも何だかい。

何度も休憩をはさみながら、三時間ほどで、山頂についた。「ついたー」と歓声をあげ、思いつきり深呼吸をする。こどもの日とあって、山頂は家族連れでいっぱいだ。私たちは二人、見晴らしの良い岩の上に腰かけ、風に吹かれながら、塩気の効いたおにぎりをほおばる。「美味しいね」同じセリフを何度も言い合った。夫の笑顔が眩しかった。

瞬く間に時は過ぎ、幾つもの山を二人で登った。夫の背中を眺めながら、息を切らして山道を歩く。辛かったこどもの日を特別な日に変えてくれたことに感謝しながら。

「佳作」

爺ちゃん、頑張りよるよ

神野 洋平（愛媛県）

私の祖父の職業は歯科医師でした。そして私の職業も歯科医師です。

小学生の頃、年に一度歯科検診のために学校にやって来る祖父は私の自慢でした。小さい頃の祖父との思い出と言えば、歯科医院の院長室と一緒に見た相撲中継。仕事終わりに大音量のラジオで応援した阪神タイガース。長期の休みに行った旅行。賑やかで楽しい思い出とともに今でも祖父の笑顔を時々思い出します。

私の成長をいつも優しく見守ってくれた祖父の口癖は、長生きはせんでええけど、洋平の○○までは○○せないかななあ、でした。

洋平が小学校を卒業するまでは学校歯科医続けないかなあ。

洋平が中学校を卒業するまでは生きとかないかなあ。

高等学校を卒業するまでは。

大学の歯学部に入るまでは。

歯科医師になるまでは。

節目節目は、いつも祖父の笑顔とともに迎えてきました。

そして、歯学部を間もなく卒業する頃、祖父は心筋梗塞で倒れました。歯科医師になったことを祖父に報告したい。その気持ちで歯科医師国家試験の勉強に励みました。当時国家試験の合格発表は、卒業から数ヶ月遅れで行われており、日に日に状態が悪くなる祖父を前に、祖父の回復と試験の合格を祈るしかありませんでした。病院の集中治療室でチューブに繋がれ、意識がなくなっていく祖父。ただただ、合格発表の日をまだかまだかと一緒に待ち続けました。ようやくやってきた合格発表の日。祖父に吉報を無事届けることができました。朦朧とする意識の中、手を握り返し、最期の笑顔を見せてくれたような気がします。

爺ちゃん。今も仕事頑張つとるよ。笑顔でこれからも見守ってね。そして、素晴らしい職業に導いてくれてありがとう。

「佳作」

歳の離れた私の弟

山本 詩文（愛媛県）

私には十歳年の離れた弟がいる。私が小学四年生の時に生まれた弟。母が病気がちだったため、私はよく弟の面倒を見ていた。おしめを替えたり、ミルクを飲ませたり、一緒に公園にでかけたり。夜泣きもあって、寝不足で学校に行ったこともあった。そして、母が闘病の末、天国へ旅立ったのは今からちょうど十年前の事。弟は当時小学五年生。母の最期、ベッドに駆け寄り、祖母が「今日からは、ばあちゃんとおねえちゃんがこの子を太らすけん。安心おしな。」と母に言った。それを聞いた弟は「ばあちゃんでも姉ちゃんでもいかん。お母さんじゃないといかんのじゃ。おかあさんじゃないといかん。」と病室中に響き渡る声でわんわん泣いた。それが私たち家族と母との最期だった。

私はその後、結婚して現在二児の母となった。第一子が生まれたとき、夜泣きが大変で、こんな時近くに母がいてくれたらなあ。と一度だけ考えたことがある。でも、私は小学生のころから弟の成長を身近に見ていたのでその経験が役に立った。先が見えていた母は私が将来困らないよう

に子育てを少しずつ教えてくれていたのだと分かった。そして、このために弟は十年もたってひよっこ生まれできてくれていたのかも。と、その時、全てが感謝に変わった。そしてそんな弟もまた、私の二人の子どもをよく面倒をみてかわいがり、遊んでくれる。結婚してから六年間、私の実家で同居していたので、生まれた時から子どもたちをよく見てくれて、お風呂にも入れてくれたり、今でもよく遊びに連れ出してくれる。これもまた、彼が父親になったとき近くに母がいなくても困らないように母が仕組んだことなのかも。と思わずにはいられない。

弟は母の死の直後、母のような人を一人でも救いたいと医者道を志した。たやすい道ではなかったが、家族みんなで助け合ってきた。今日も彼は、研修医として目を輝かせながら愛顔で研修先の病院へ出かけて行った。

広告

咲く、
きずな、
未来へ。

地域に根ざす、
信用金庫として。
手から手へ。
心から心へと。
つなげてゆきたい
想いがあります。



「愛」ある街のホームドクター
愛媛信用金庫

広告

住友グループ

住友金属鉱山株式会社別子事業所
住友化学株式会社愛媛工場
住友重機械工業株式会社愛媛製造所

住友共同電力株式会社
住友林業株式会社新居浜事業所
三井住友建設株式会社四国支店

広告



いつでも、いつまでも。
地域に寄り添い、あなたと共に。

くらしの保障、相談するなら



●ご加入にあたりましては、お近くのJA(農協)へお問い合わせください。
どなたでもご相談いただけます。
■JA共済ホームページアドレス <http://www.ja-kyosai.or.jp>

18481050119

広告

世界中の人々へやさしい未来をつむぐ

地球環境への貢献

私たち大王製紙グループは、
地球環境と調和したグローバルな事業展開を通じて環境問題に
積極的に取り組み、持続可能な社会の実現を目指します。

- ・グループで使用するエネルギーの約50%を、廃棄物を燃料としたバイオマスエネルギーに転換
- ・ボイラーの燃料を石炭や重油の化石燃料から、木くず・紙くず・廃プラスチック固形燃料(RPF)、廃タイヤなどのバイオマス燃料に転換することで1990年度比89,000tのCO₂削減を達成

バイオマスエネルギー比率

50%

CO₂削減(1990年度比)

89,000t

ガソリン換算で38,335kl/年相当のCO₂削減

「エピソード部門」高校生以下の部

「知事賞」

願い事

松浦 佑美（愛媛県 高校生）

あれは、私が小学生の時。その日は七夕に近く、姉と一緒に願い事を書いていた。その時、姉が私に言った。「ゆみ、目が良くなりますように書いて書いて書いて。」私はこう言った。「書かんよ！ だってもう良くならんもん。」

私は、あきらめていたのだ。自分の目がまだ良くなると思いつつ、期待していたら、そうならなかった時に一番悲しくなるのは自分だから。いつそのことあきらめていた方が楽だ。しかし数年後、私の視力は、何の前触れもなく、予想を超えて一気に低下してしまった。今まで見えていたきれいな風景は見えにくくなり、花も触らないと分からなくなった。どうしてこんなに早いのか？ 何で私なのか？ そんな考えが頭の中をグルグル回った。

そんな自分を救ってくれたものがある。それは、サウンドテーブル

テニス、視覚障がい者のための卓球だ。視力があってもなくても、感覚だけでできる。それが一つの希望になった。今は、私の左目はほとんど見えず、右目も裸眼で文字を読むことができなくなった。今日もちゃんと見えるだろうか。不安になる時がある。自分に負けそうになる時は、昨年愛媛県で開催された全国障害者スポーツ大会のことを思い出す。大会前は大きなプレッシャーを感じ、家に帰ると泣いていた。しかし、私は自分と闘った。あの時、二セット連取され、もう後がないという試合で、あきらめずに最後まで戦った。そして勝利した。試合が終わって、泣きながら笑った。あの時自分に勝ったのだから、きつと大丈夫。絶対に乗り越えられる。そう思えるようになる。

いつか完全に私の目が失明してしまい、悲しくて、苦しくても、私は見えていた記憶と一緒に、光と音の世界を生きていく。だから今は、できるだけ長く見えていたいと思うようになった。これからも私には、高い壁があると思う。しかし私はそれを乗り越えていきたい。乗り越えた壁は、自分にとって、今までとは違うものに見えてはいるはずだから。

「特別賞」

大好きな町

大石 美優（愛媛県 高校生）

西日本の記録的な大雨により町全体が茶色い泥水に浸かった。私は、ただただスマホを眺めることしかできなかった。自分が歩いていた道が消え、友達とご飯を食べていた店が消え、おいしい晩ごはんのための材料を買うスーパーが沈んだ。私は、ずっと夢の中にいる気分だった。

祖父と祖母が住んでいる家が床上浸水の被害にあった。私も少しの間住んでいた家だったのでとても悲しかった。水がひいたあと片づけに行くことになった。家は近所の方と一緒にあらかた片付いていた。

「これを機会に戸棚も整理しよう！」
と、祖母が言った。私と弟は祖母のコレクションがたくさん入った戸棚の中身を全て取り出すことにした。濡れて開きにくくなった引き戸を無理やりこじ開けると、中からたくさんものが出てきた。多趣味な祖母は本や画材、裁縫道具、習字道具などいろんなものを持っていた。

「ばあちゃん、物が多いよ。」

そう言いながら取り出ししていると祖母が、取り出した物をひとつひとつ手に取ってエピソードを話してくれた。そのエピソードは全て家族に関するもので、中には私の父のエピソードもたくさんあった。父の卒業アルバムが出てきたときは三人で見入ってしまった、笑いが絶えなかった。

最後に畳をはがし終えて帰ろうとしていたとき、「二人が来てくれて本当に助かった。ありがとう。」と、言ってくれた。私は心の底から嬉しかった。自然と三人で笑っていた。

町を通っていてもたくさんの方々活動している姿を目にする。しかしマイナスな表情をしている人を見かけない。みんなしんどくても会話をしながら笑っている。そんな光景を見て本当に胸が熱くなる。今はしんどい時かもしれないけれど、これ乗り越えた先には「もっと笑顔のあふれる明るい大洲市」があると私は信じている。

おばあちゃんの笑顔

近藤 陽菜（広島県 高校生）

私は高校一年生まで松山で家族と暮らしていたが、高校二年の春、単身で広島へ引っ越した。理由は私が高校で不登校になり、学校へ行けず留年が決まったので広島の通信制高校へ転校することにしたからだ。自分のことを誰も知らないところでやり直したいという気持ちが強く、松山にいられなくなった私を受け入れてくれたのが広島のおじいちゃんとおばあちゃんだった。こうして新しい家族との三人暮らしが始まった。

おばあちゃんは私が知っている人の中で一番の心配性だ。私がバイトや学校で帰りが遅くなるととても心配する。なので私は少しでも心配をさせまいとこまめに連絡をいれて、帰る時間を知らせる。するとおばあちゃんは自分で私に乗っている団地のバスの時間を計算してバス停まで迎えに来てしまう。おばあちゃんは足が悪くて何かにすがらないと歩くのが大変なので、私はそんなおばあちゃんがひとりで手を後ろで組んで歩いてきてしまうことをとても心配しているのだが、やめてくれない。バスが見えると嬉しそ

うに手を振って、私が降りてくると運転手さんにぺこりと頭をさげる。そして帰りは私の腕にすがって一緒に帰る。家に帰ると、私が晩ごはんを食べているのを嬉しそうに眺め、ときどき私の頭をなでて、私がごちそうさまと言うと、安心して大きないびきをかきながら寝てしまう。

私が来てからおばあちゃんの生活は大きく変わったろう。もう七十をこえているし、体に負担がかからないか心配だが、私は優しいおばあちゃんと一緒にいられてとても幸せだ。いつかおじいちゃんが、私が来てからおばあちゃんがよく笑うようになったと言っていた。おばあちゃんはいつも私に幸せをくれてありがとうと言ってくれる。私はおばあちゃんの笑顔を見るたびに、一緒にいられる時間に感謝して、大切にしようと思うのだ。

「優秀賞」

キャプテンのポケット

花山 実紗希（愛媛県 高校生）

先輩たちとまた一緒に野球がやりたくて続けた四年目。私は公式戦には出場できないと分かっていたが、一緒に練習してきたチームメイトを少しでも近くで応援したくて、夏の大会の女子選手のベンチ入りの許可をお願いする手紙を高野連に出した。三回目の手紙でやっと返事があったが、女子選手のベンチ入りは認められなかった。

監督にはノックの補助はできると聞いていたが、やはりだめだったと伝えられた。背番号すらもらえなかった。失望しかけていた頃、母がユニホームを着た小さな私の人形をつくってくれた。母が先輩たちにお願ひして、小さな私の人形をベンチに入れてくれることになった。

大会当日、私は小さな私の人形をキャプテンに渡した。それから私はスタンドで、グラウンドにいるチームメイトをマネージャーたちと一緒に応援した。結果は負けてしまっただけ、力を出しきったと思う。

試合後のミーティングが終わると、キャプテンが小さな私の人形を持って私に話してくれた。それは、キャプテ

ンが試合の間ずっと、小さな私の人形をポケットに入れてプレーをしてくれていたということだった。私はとても嬉しかった。ベンチ入りを諦めていた私だったが、先輩たちと一緒にグラウンドでプレーできたんだと思い、涙が止まらなかった。

小さな私の人形は少し汚れていたが、それが先輩と一緒に戦った証だと思った。私は本当に良い先輩に巡り合えたと思う。キャプテンには感謝してもきれないほどだ。嫌な出来事が、一生忘れることのできない最高の思い出になった。私は夏の大会を先輩たちと一緒に戦ったんだと、少し汚れた小さな私を見るといつも誇りに思う。

「優秀賞」

民泊ありがとう

市山 茜（愛媛県 高校生）

えがおつなく愛媛国体で、鬼北町は女子バレーボールの会場となった。私の住んでいる地区は民泊に名乗りをあげた。知らない人が自宅に泊まることに窮屈さを感じていた。両親は、仕方なくと言った様子で畳の貼りかえや布団の洗濯をはじめた。両親と同じくあまり乗り気でなかった私は、何も手伝わなかった。

地域の人々は楽しそうに準備をしていた。北宇和高校も町内各所に飾るための花の栽培を早くから行っていた。選手の手のお料理を作る調理班は何度も実習し、小学生は歓迎の旗を手づくりしていた。

迎えた当日、大分県のチームが到着した。いろいろと文句を言っていた両親だったけれど、それが嘘のように笑顔で高校生二名の選手を迎え入れていた。「なんだ、本当は楽しみだったんじゃない。」思わず私は苦笑した。

初戦の結果は勝利。勝ったことを聞くと、とても嬉しくなった。二回戦からは、家族と一緒に応援に駆けつけた。身動きできないほどの人で埋まった観客席。応援団に混ざ

るようにして試合を見る。両親も同じ地区の人も大盛り上がりで、応援席の温度が瞬く間に上昇するのを肌で感じた。勢いに乗った大分は見事決勝戦に進出した。遠く離れた他人の家に泊まり、不自由な思いをしながらも自分の持てる力を全力で振り絞る選手たち。ぜひ優勝してほしいという気持ちで芽生えていた。

決勝戦は白熱した勝負となったが、惜しくも敗退。選手はみんな涙を流していて、それだけ想いが強かったのだと悟った。涙は出てこなかったけれど、心は鉛のように重くなった。選手はもちろん、地域も一体となって燃えた国体。いつまでも胸に残る思い出となった。

会場で選手を見送った。腫れぼったい目をしていながらも、選手たちは笑顔を見せていた。気づけば私も笑っていた。お互いに笑顔を向けながら、最初で最後の別れを告げた。

「入選」

おばあちゃんの日記

別宮 彩音（愛媛県 高校生）

私の祖母は元気だ。生け花に俳句、大正琴に朗読、そしてカローリング。八十歳近くになった今でも習い事や趣味がたくさんあり、学生の私と同じぐらい祖母の毎日はずいぶん、充実している。そんな祖母はここ二十年、毎日一日たりとも欠かさず、日記をつけている。

小学四年生のことだ。私はその日記を見てみたいと思い、本棚に並べられた日記の一冊を手にとった。それは私が生まれた年のものだった。めくってみると、友人との会話の内容やその日あったイベントなど、様々な事柄が記されていた。そんな中、私の生まれた日、七月七日のページを見て、私はとても感動した。

「平成十二年、七月七日、孫が生まれた。織り姫様のような優しくて可愛い女の子。これからよろしくね。」

昔の出来事を語ってくれることはあったが、実際に形に残った祖母のその時の思いを見ると、おさえられない感情がどっとあふれた。

「私」という存在の誕生を待ちわびていた人がいたこと

に感慨深い気持ちになった。

他のノートも見てみると、幼い頃の私がわがままを言ったこと、弟とケンカをしたこと、一緒にプールへ行ったこと。現在までの私との日々が淡々とつづられていた。

それを見て以来、私も日記を始めた。学校であった楽しかったことやつらかったこと、悩み事や友人との思い出。日々の出来事を簡単に書き留めている。これから先、十数年、数十年と年を重ね、いつか私も「子どもを出産した。」「孫が生まれた。」と書く日が来るかもしれないと思うと少し楽しみだ。いつか昔のページを繰り、「おばあちゃんはあなたが生まれたとき、こう思っていたんだよ。」と孫に日記を見せる、いつかの日まで、私は日記を書き留めていると思う。

「入選」

笑顔の手紙

芳谷 華林（愛媛県 高校生）

私は、学校の活動としてあるプロジェクトを進めていた。作成した企画書が選ばれ、実践することが決まったのだ。初めは自分の案が認められ、期待を背負うことに誇りさえ感じていた。しかし、現実はその甘くない。寝る間を惜しんで考えた案は、たった一言でいくつも消えていった。交渉のため、休日は様々な機関を走り回り、街行く人に声をかけた。スーツ姿の大人だらけの場所に、制服姿で一人乗りこむ心細さといったら！冷たく断られた時には、全身の血が止まったような気さえたのである。また、私は部活動の部長も務めていた。後輩たちの指導、スケジュールの調整など、山のような仕事に私の体はボロボロだった。そのうち何をやっても上手くいかなくなり、そんな自分に嫌気がさした。期待に応えるどころか、当たり前前のことすらできない。両親ともぶつかり、私の居場所はどこにもない。私って、誰かに必要とされているのかな。夜な夜なそんな考えが頭から離れず、枕を濡らす日々が続いていた。

ある日の放課後、私は教室で一人帰り仕度をしていた。

ひらり。小さな紙が机の中から一つ、二つ、三つ……。それは、クラスメイトからの手紙だった。大丈夫？お疲れさま。無理しないで。皆心配しているよ。そこには、私への励ましの言葉がたくさん書かれていた。胸が熱くなった。私は独りではなかった。皆、私を見てくれていた。私の居場所は、こんなに近くにあったのだ。

そして今、私は表彰台に立っている。私の研究レポートが入賞したのだ。あの時の皆の言葉が無かったら、きっとここに立つことはできなかっただろう。カメラのレンズに、幸せそうに笑う私が映る。この笑顔は、ボロボロだった私に皆がくれた宝物だ。私は、手紙を通して人の温かさを知った。今度は私が誰かの笑顔を守ろう。もう私は独りじゃない。帰ったら思い切り笑顔で言おう。

「皆、ありがとう！」

「入選」

失ってわかる宝物

蔭平 莉奈（愛媛県 高校生）

私の祖母は今年亡くなった。私にとって祖母は、第二の母でもあった。祖母から教えてもらったことは多く、今までもこれからも役に立つことばかりだ。祖母は、背が低く腰がまがっていた。でも元気で、優しく沢山の人から慕われていた。朝早くから道の駅に出すお弁当や巻き鮨を作り、終わると畑仕事、朝から夜まで働き、じっとしていることができない働き者な祖母だった。

保育園に通っていた頃両親が共働きのため祖母の家に行くことが多く、祖母は母のかわりとして、おやつや夕食を毎回作ってくれた。祖母の作った小米や丸もちが私の好物で、祖母と一緒に食べる夕食は、私にとって大好きな時間だった。家事でいそがしい時でも手をとめてわがままを聞いてくれたり、遊んでくれたりした。嫌なことでも悩んでいた時はアドバイスをしてくれ、何でも知りたがる私に沢山の知識を教えてくれた。それは今までも役に立ち、これからも役に立つ必要なことだ。

私が祖母から教えてもらったことで一番心に残っている

ことは、「一番じゃなくていい普通でいい。いつも笑顔でいなさい。」という言葉だ。この言葉に私は沢山救われた。「普通でいい」という言葉には、一番を取らなくていいが、真中にはいろ、それより下に下がるなという意味がある。勉強や習い事の時はこの言葉に救われている。行き詰った時思い出し、一番じゃなくても上位を狙おうと思える。だからやる気が出るし長続きもする。「いつも笑顔でいなさい」という言葉には、印象が大事、周りの雰囲気をよくする、悩んでいる時自分を励ます、下を向かない、などの意味がある。

祖母は、私を言葉で応援してくれ背中を押してくれていた。失ってわかる宝物。これからも私に力をくれもつと役に立つ大切な宝物。たくさん贈り物をくれた祖母が大好きだ。

今日も教わったことを胸に歩いていこう。

「入選」

誰かの支えに

高野 未祐（愛媛県 高校生）

「もうスポーツをするのは厳しいと思う。」そう告げられた中学一年の秋。私は当時、バスケットボール部に所属していた。小学生の頃から続けており、ガードというポジションでプレーしていた。ガードは、試合中に指示を出し、仲間を動かすというとても大切なポジションだ。しんどかったが、すごくやりがいを感じていた。ある大会の試合中、突然膝が痛くなり、動けなくなった。そして、病院で診てもらい、医者から告げられた言葉は、私を暗闇で包みこんだ。

それからは「プレーできないなら」と、バスケットを見るのが嫌になり、部活に行かない日が続いた。そんなある日、顧問から

「マネージャーにならないか。」

と言われた。初めは断ったが、次第に「やってみたい」と思うようになった。

久しぶりに部活に行くと、仲間の一人から

「おかえり。」

と声をかけられた。すごく嬉しかった。この瞬間、私はみんなを支えられる存在になりたいと思った。それから、テーパーングの巻き方や怪我の対処法、審判の仕方など、様々なことを覚えた。少しでも力になりたかった。

中学三年の夏、最後の大会でユニフォームをもらい、ベンチに入った。スコアをつけながら、誰よりも声を出した。とても楽しい時間だった。プレーはできなくても、自分ができることをやりとげようと思っていた。試合が終わったあと、顧問や仲間たちから、

「ありがとう。お疲れ様。」

と言ってもらえた。部活を続けていてよかったと感じられた。

私は今、放送部に所属しており、高校野球のサポートをしている。ケガでスポーツができなくなった私でも、スポーツに携われていることを嬉しく思う。高校三年、最後の夏、悔いなく終わりたい。

「入選」

どん底の私を救った笑顔

東 竜希（愛媛県 高校生）

私は、家族が大好きです。その中に、私が世界で一番尊敬していて、人生の目標としている人がいます。それは父です。どれだけきつい仕事がこようと、真正面からぶつかっていき、自分にとって一番大切な家族を養っていくために命をかけて取り組み、必ずやりきって家に帰ってきます。そんな父の背中には誰よりも大きく、誇らしく見えます。つねに元気で明るい父は家族の太陽のような存在です。

しかし、そんな父が去年の十二月にがんになり、余命三ヶ月と宣告されました。信じられませんでした。その日の事はほとんど覚えていません。とにかく、その事実を信じたくなくて、狂ったように泣いて泣き続けた記憶しかありません。その次の日、私は学校でした。もちろん行ける状態ではなかったので、学校に休むと連絡し、また泣いていました。その時、学校から一本の電話がありました。いつも元気いっぱいの保健の先生からでした。なんでも聞くから保健室においでと言ってくれました。その後、保健室に行き、なんで俺の家族にこんなことがおきるんぞ、と

いう怒りや、これからの不安などとにかくすべてを吐き出しました。話をしている最中は、いつも笑顔の保健の先生も泣いていましたが、最後には、いつもどおりの笑顔でなぐさめてくれました。その笑顔はいつもの笑顔と違って、とてもおちつく笑顔でした。

その後、一番信頼できる同級生に父さんの事を話しました。その人が最後に、苦しくなったらいつでもうちを頼ってねと目に涙を浮かべながら見せた笑顔は今でも忘れません。その人は、今でも私に元気をくれます。こんな素敵な人に出会えて本当によかったと心の底から思います。その人のおかげで、気付けば自分に今まで通りの笑顔が咲いていました。

支えてくれたみんなのおかげで私は今元気にすごせていて、父も余命宣告を乗り越えて今も、家族の太陽です。みんなの笑顔が私を救ってくれた。今も感謝でいっぱいです。

広告



ずっと一緒に。

ソラトくん

本社

東京都千代田区内幸町2-2-3 日比谷国際ビル15F
TEL 03-3502-1601(代)

この星と人のチカラに。

SOLATO

太陽石油株式会社 <http://www.taiyooil.net/>



明屋書店
HARUYA

明屋書店MEGA平田店

~nota nova (ノータ・ノヴァ) stationery~



書籍・雑誌・コミック・CD&DVD・Blu-ray・GEO

「HARUYA」の商品群は幅広い。文具については高学年専ら従来の光面文具、学業文具、ファンシー文具まで、マルチに揃っています。

愛媛県松山市平田町81-1

☎ 089-978-0600

10:00~22:00

年中無休



SerenDip 明屋書店 アエル店

広告

お客様の興味や暮らしを提案



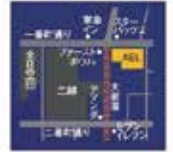
かほしきデブちゃんグッズ好評発売中!

愛媛県松山市大街道2-5-12

アエル松山 2F

☎ 089-941-4242

10:00~22:00 (年中無休)



広告

この街に、あってよかった。

好きになれるスーパーってなんだろう?

私たちはその答えに向かって、たくさんの試みを始めます。

まじめに、たのしく、あたらしく。笑顔や便利や

ワクワクする体験をたくさん生み出して、フジへ。

この街に、あってよかったと、

たくさんの人に言ってもらえるように。

これからのフジに、ご期待ください。



【本部】松山市宮西一丁目2番1号

感動を、けずりだそう。

マルトモ

広告



盛り付け例：ソフトけずり

プレ節[®]

PREMIUM

Dried bonito

鹿児島県枕崎製造のプレミアムなかつお枯節を使用。

「おいしさ1.5倍^{*}」の琥珀色が特長です。^{*}当社一般品比

「プレ節」きざみかつお



1g×12袋

花けずり



25g袋

「プレ節」25ミクロンソフトけずり



1.5g×12袋

好評発売中

おかげさまで、創業100周年を迎えました。

本社〒799-3192 愛媛県伊予市米湊1696番地

TEL: (089)982-1151

マルトモ



<http://www.marutomo.co.jp/>

「写真部門」

知事賞

ピカピカの1年生

小野 早苗(神奈川県)

新しいランドセルを背負って、
ぴっかぴかの愛顔。



白川義員特別賞

無限の愛

山崎 唯(熊本県)

妹を抱きしめて思わず笑顔がこぼれる兄。
そこには言葉には出ない無限の愛が
溢れていました。



河原学園賞

**命の輪廻
～笑顔の会話～**

中森 理紗(愛媛県)

曾祖母とひ孫です。年齢は80歳以上
離れており、娘はまだ言葉を話せませんが、
笑顔で気持ちは通じています



優秀賞

鯉のぼりのように!

中村 天津(京都府)

4人目の孫の初節句。鯉のぼりを見に行きました。鯉のぼりのように元気に伸び伸び育ててね!



優秀賞

握手

佐々木 順哉(埼玉県)

生後2ヶ月の娘が、指を握って笑いかけてくれました。



優秀賞

楽しく笑う

井田 金久(三重県)

祭りの日、町内会長が一人でカキ氷を食べていてそこにおばあちゃんが来て色々と話をしているうちに大笑いに



入選



大好き!
赤いブランコのある公園!

杉本 宜之(愛媛県)

娘の大好きな公園。おでかけどこへ行く?と聞くと真っ先に”赤いブランコのある公園!”と答えてくれます。

初めての雪

渡邊 久枝(愛媛県)

初めて雪を見た孫…
なんだかこっちまで楽しくなりました。



**この頬のぬくもり、
ずっと忘れない**

岩瀬 友香(三重県)

遠くに住んでいるひいばあちゃんに
一年ぶりに会い、喜びの頬ずりをし
にいきました。



入選



わーい!
こいのぼりまで
ジャンプ!

宮谷 美由香(愛媛県)

家族で行ったれんげ祭りでの例の如く
「高い高い」を求める娘。鯉のぼりの
ように大空に飛ばたけ!



わーっはっは

石崎 美恵(愛媛県)

『LOVE&PEACE&SMILE』





各賞



愛媛県商工会議所連合会賞

孫と折り紙

法隆 直史(埼玉県)

お盆に帰省した孫と折り紙をして遊んだ。

一般の部

愛媛広告協会賞

コミカルファミリー

忽那 博史(埼玉県)

笑顔が絶えない仲良しファミリーです。



愛媛県獣医師会賞

best partner

坪井 琉華(愛媛県 高校生)

この写真を撮ったときカメラ目線じゃないと思ったけど撮影している私の顔を見ていると気づきました。

小・中・高校生の部 (小学生未満含む)

愛媛県情報サービス産業協議会賞

夢の書道パフォーマンス甲子園!

山戸 祐璃(愛媛県 高校生)

墨のにじむような努力の集大成です!
たくさんの人に感動を与えることができ、とても幸せでした。



愛媛県歯科医師会賞

94 回目の秋の訪れ

小笠 友理子(香川県 高校生)

久しぶりに曾祖母と公園で散歩をしたときの写真です。



愛媛県理容生活衛生同業組合賞

笑賀男(えがお)

唐澤 賀伊(長野県 高校生)

滅多に笑わない祖父が笑った時の笑顔が好きです。その笑顔を読みたい、そんな思いで「笑賀男」としました。

小・中・高校生の部
(小学生未満含む)

愛媛県IT推進協会賞

あぁ!!美味し!アッぷっぷー!!

中野 殊実(兵庫県 高校生)

子供でも飲めるお子ちゃまビール!大人の真似して1杯ぷはぁと飲みました!気がついたら口の周り泡だらけ。



愛媛県経済同友会賞

ヨッシャーいくぞ!

村島 大晴(沖縄県 高校生)

「ヨッシャーいくぞ!」という人物の表情が伝わるようシャッタースピードを早くして撮影しました。



審査委員紹介



新井 満
(審査委員長)

1946年新潟県生まれ。作家、作詞作曲家、写真家など多方面で活躍。1988年、『尋ね人の時間』で第99回芥川賞受賞。2005年、『この街で』（作詞：新井満、作曲：新井満、三宮麻由子）を制作。2007年、『千の風になって』で第49回日本レコード大賞作曲賞を受賞。2014年、正岡子規の俳句にメロディをつけ、松山市民の愛唱歌「春や昔」を制作。子どもから大人まで松山市民に愛される曲となる。2018年、新曲「石鎚山」を作詞・作曲。



神野 紗希
(審査委員)

1983年愛媛県松山市生まれ。2001年、松山東高等学校時代に第四回俳句甲子園にて団体優勝、「カンの余白八月十五日」が最優秀句に選ばれる。2004年、第一回芝不器男俳句新人賞坪内稔典奨励賞を受賞。2019年、『日めくり子規・漱石 俳句でめぐる365日』（愛媛新聞社）にて第34回愛媛出版文化賞大賞を受賞。明治大学・玉川大学・聖心女子大学講師。



白川 義員
(特別審査委員)

1935年愛媛県四国中央市生まれ。ニッポン放送、フジテレビを経て、1962年フリー写真家。1993年に南極大陸一周に成功（史上初）。1996年から「世界百名山」撮影プロジェクトを開始、作品集「世界百名山」を出版。2002年、国連が「国際山岳年」を記念して、作品集「世界百名山」の中から12作品を選んだ記念切手を発行。記念切手12種類全点を1作家で制作したのはフェルメール、ダリ、ピカソなどに続いて世界で11人目、写真では初。2012年11月、作品集「永遠の日本」発表。



中村 時広
(審査委員)

1972年、第13回毎日芸術賞 1972年、芸術選奨文部大臣賞
1988年、第36回菊池寛賞 1995年、第27回日本芸術大賞
※上記日本を代表する芸術4賞総てを受賞したのは、文学、美術、音楽等総ての表現分野を通して白川義員ただ一人。
このほかにも、1981年、全米写真家協会最高写真家賞（史上10人目）を受賞するなど世界を代表する写真家。
1960年愛媛県松山市生まれ。1982年三菱商事株式会社入社。
1987年愛媛県議会議員。1993年衆議院議員。
1999年愛媛県松山市長。連続3期当選。
2010年愛媛県知事。2018年3選、現在3期目。

子どもたちの未来のために、 伝えたい想いがあります。

JAバンクえひめでは、食と農業に対する学習や農業体験などを
はじめとした様々なCSR活動を通じて、
自然と調和・共生できる循環型社会の実現をめざし、
地域の皆様の豊かな未来の実現に取り組んでいます。

JAバンクえひめキャラクター
ぱんじゃくん



JAバンクえひめ

JA うま

JA 周桑

JA 松山市

JA にしうわ

JA 新居浜市

JA おちいまばり

JA えひめ中央

JA ひがしうわ

JA 愛媛県信連

JA 西条

JA 今治立花

JA 愛媛たいき

JA えひめ南



JAバンク えひめ
(愛媛県内JA / 県信連)

「JAバンクえひめ」は、愛媛県内12JAと県信連の総称です。

JAバンクえひめ

検索

愛^え顔^{がお}感動ものがたり
「感動のエピソード」
& 「愛顔の写真」

平成三十一年二月発行

発行 愛媛県

スポーツ・文化部文化局

文化振興課

〒七九〇一八五七〇

愛媛県松山市一番町四丁目四一

TEL (〇八九) 九四七一五五八一

印刷 株式会社 美統

■平成29年度 一般の部 知事賞「笑顔の魔法」長友 奈奈



■平成29年度 高校生以下の部 知事賞「えがお」上甲 真子



がんばるけん
えひめけん!



「エピソード」部門の知事賞・特別賞（平成29年度からは一般の部、高校生以下の部知事賞）受賞作品については、水樹奈々さんの朗読に田村祐子さんのサンドアートアニメーション等を合わせた動画作品をインターネットで配信しています。

愛顔感動ものがたり

検索

